

つながりが織りなす ふるさとへの旋律

いつも、明日のことを考えているんです。—その人は笑って言う。
これは、人を愛し、芸術を愛する、ある男性の物語。



金子さんに会いにゆく

残暑続く8月、北海道蘭越町にいる、その人を訪ねた。金子一憲さん(79)。「あと数か月で、80になるんですよ。」「二カツと歯を見せて笑う顔は、年齢を感じさせない。

訪ねたのは、同町昆布町の森のなかに、ひっそりと佇む音楽ホール「蘭越パームホール」。挨拶もそこそこに、百聞は一見に如かず、とばかりに、ぐるりと案内してくれた。



まず足を踏み入れると、ふわりと木の香りに包みこまれる。教会のような清麗さと、木のあたたかみが共存した不思議な空間である。美しい音色が、ステージから客席へむかつて、すーっと渡っていくのが感じられるようだ。アーティストからは、音が全身に響く「面白いホール」と称され、愛されているとこぼす。

木造平屋建て、約80席を擁するこのホールは、多くの人たちの力で、ほぼ手作りで

できている。



「つながり、だね」

「この言葉ほど、金子さんを言い当てた言葉はないかもしれない。

金子さんは、現在NPO法人「花と笑顔と音楽の里」の代表として、パームホールの管理や、催される演奏会の企画運営を行っている。ホールが完成したのは、今からちょうど20年前のことである。

金子さんにとって、私設ホールを持つことは長年温めてきた憧れだった。しかし、

ホール建設など、知識も経験もなく、文字通りゼロからのスタート。課題は山積していた。「無謀な夢」を前に、当時幼かった娘からは、お父さんはホラを吹いている、と言われたこともあった。

それでも、求めているモノやコトを、一つずつ開示していくことを、諦めなかった。すると、手を差し伸べてくれる人物が目の前に現れた。そして、また次の課題に直面したとき、今度はその人物が別の協力者に引き合わせてくれた。―そんなできごとを繰り返していくうち、床板、椅子、ピアノに装飾……紡がれたつながりが、パームホールを徐々にかたちにしていった。

「自分から声をあげればね、案外、人って助けてくれるものなんです」

夢をともに見て、歩いてくれた人たちへの感謝をかみしめるように。呟かれた言葉は、重く響く。



「大事なものは、人を大切に

するってことですよ」

パームホールがユニークなのは、開設経緯だけではない。その秘密は、演奏会にも隠されている。

実は、パームホールの隣には、もう一つ建物がある。その名も「パームハウス」。ここは、一階が食堂、二階が宿泊施設を兼ねている。

というのも、パームホールで開催される演奏会は、演奏家の演奏だけでは終わらない。閉演後、このパームハウス一階は「打ち上げ」会場に様変わりする。ここでは、演奏家、スタッフ、観客が一堂に会し、垣根を越えて交流する。

さらに、演奏会を行うアーティストらは、パームハウス二階で宿泊ができる。季節によつては、地域住民の協力を得て、収穫等の農業体験をすることもあるという。そんな

な、地域ぐるみでの「ほっとする」居心地の良さを気に入り、過去には数か月にわたって宿泊したアーティストもいた。ここで過ごす時間が、まるで「演奏会」なのだ。「芸術家っていうのは面白いですよ。全く違う世界をみせてくれる」

走り続けてきた裏には、芸術とそれを生み出す芸術家への、やまない敬意がある。



1階食堂(上)、ポスターが所狭しと並ぶ玄関(下)にも、愛情がぎゅっしり

こうした「演奏会」を語るうえで欠かせないのは、ボランティアの方々の存在だ。彼らは、演奏会のあらゆる準備——会場内外の清掃、草刈り、その他細やかな整備、打ち上げでふるまわれる手の込んだ料理の下

ごしらえと調理など——を一手に担う。いわば、少数精鋭の心強いサポーターである。ことあるごとにボランティアの方々へ感謝を口にする姿からは、強い信頼を覗わせる。



しかし、運営は初めから順風満帆だったわけではない。現在の運営体制になるまでには、困難も経験した。開設初期の頃、前身となる運営体制の在り方に限界を感じ、一度は解体する判断を迫られた。そうした経験を経た今、支えられている実感はより一層強く、支えてくれる人たちはかけがえない。

「みんなには、感謝しかない」ともに夢を見て歩いてくれる人たちへの思いは、設立以前からずっと変わらない。

パームホールを彩る数々のユニークさの根底には、「人を大切にする」という一念が貫かれている。

「育ち合い」のなかで

金子さんは、「音楽には三つの要素が必要」という。曰く、「器、アーティスト、そして聞き手」。どれが欠けても、音楽が成立することはない。だからこそ、すべてを大切にしている。

同時に、パームホールという極上の器の中にあつて、アーティストは、聞き手は、どうあるべきか。アーティスト、そして地域住民をはじめとする聞き手との間で、生まれるつながりを大切に、自ら「育ち合い」と表現する関係や場をめざし、今なお模索を続けている。



金子夫人が、余剰野菜を引き取り手づくりしているという特製トマトジュースは絶品!

一粒で二度美味しい人生を

常に、前を向いて進み続けてきた金子さん。そんな彼が、自らの来し方を振り返るとき、引き合いに出したのは、かの有名なキャッチコピー。江崎グリコが販売するキヤラメル「アーモンドグリコ」のCMで、かつて一世を風靡したそれである。第二の人生を歩む以前の思いを、そう語る。



金子さんは、蘭越町内で衣料品店を営んでいた。社長を務めていた頃、ある転機が訪れた。町内人口が、目に見えて減少していったことだった。約八千人であった人口は、この頃には約六千人に減少していた。「このままだといずれ半分に、将来的には二千人くらいになるかもしれない」。

自営業への少なからぬ影響を予感するなかで、金子さんは、これからの人生を考え始めるようになっていた。父の家業を継



演奏会には、様々な困難にある人も訪れる。金子さんは、生の音楽が人を癒す力を信じている。

いで以来、長く衣料に携わってきた。それは、自分が他者に提供し得る「形あるサービス」だった。しかし、来る時代と自らの引き際を意識したとき、気づいたのは、無形の価値だった。

「よし。今度は、形のないものを。では、形のないものとは何か? 行きあつたのは、音楽だった。」

「若いころから、音楽が好きだった」
まっすぐで純粋な思いは、やがて、探していた「形のないもの」と結びついた。

「これからは、音楽だ。」
甘やかで濃厚な第二の人生は、このとき、動き出した。

ふんわりとき、子どもたちへ

開設20年の時を経て、今、金子さんが思いを寄せるのは、地元蘭越町の子どもたちである。

演奏会に訪れたアーティストらと地元小学校をつなぎ、放課後に小さなコンサートを開くこともあるという。アーティストらと子どもたちとのピアノジャズセッションの様子は、生き生きとして、笑い声さえ聞こえてきそうである。

「子どもたちには(片手で)どんどん弾かせて、なんでもいいんだけど、でも(アーティストは)リズムが合ってるから、ちゃんとなってるんだよね。そしたら、子どもも『あらっ俺も!?!』って。面白いもんだから順番に並んでね、次から次と弾いていって」「子どもたちに向けるまなざしは、どこまでもあたたかい。

「子ども、歓迎です。お父さん、お母さんが聴かせたいからって言って、わざわざ自

分は(会場に)入らないのに、『子どもまた後で迎えに来ますから、よろしくお願ひしますー!』って。いやあ、嬉しくなっちゃうよねえ。」

「ふるさとに愛着がなくなったというけれど、今の大人が子どもに対して、ふるさとづくりをしていなかったから。」

広い視野は、地域の課題をみつめている。だからこそ、親から子へ、受け継がれる「ふるさと」の思い出があること。その隣に音楽があること。その瞬間に立ち会ったとき、喜びをかみしめる。



一方で、こうも語る。

「子どもたちのためとか、地域の人のためとか、そういうのではないんですよ。芸術って、そういうものではないでしょっ!」
決して押し付けがましくなく。しなやかに、軽やかに。されど、真剣に。

そんな金子さんは今、新たな関連施設の建設を計画中だという。構想段階のその建

物の名は、「ほどほど」。名前だけは、もう決めている。

「これからも、ほどほどに。このまま、やっつていくと思います」



パームホールからは、羊蹄山がよく見える

金子さんは、今日も未来のことを考える。そこに、あたたかな人たちとのつながりを、その人たちの笑顔と幸福を、描き出す。願わくは、その隣にいつも、音楽がありますように。
(保健科学院 菊地真海)